

元気あおもり応援隊会議（首都圏）

日時：平成30年2月16日（金）
18時～20時30分
会場：ホテルグランドパレス
「桂の間」（第1部）
「桐の間」（第2部）

「元気あおもり応援隊会議」（首都圏）を平成30年2月16日（金）午後6時からホテルグランドパレス（東京都千代田区）で開催しました。

当日は、16名の応援隊の方々が参加し、会議では「人幸増大大作戦（「経済を回す）ための取組について」をテーマに意見交換を行いました。

その概要は、次のとおりです。

.....

【開催挨拶】

（青森県知事 三村申吾）

おばんでございます。

東京も先般、雪が降ったようでございますが、青森は黙っていても降っていますので、今さら降ったの降らないとは申し上げませんが、今年は本当に多くて。今日、除雪のことで国交省や総務省を市町村と一緒に回ってきたんです。いやあ、日本中が温暖化という括りのはずだったんですが、こういう時もあるんだろうなと。むしろ気象変動での、これが逆に温暖化の恐怖かなと。結構重たい雪が降っています。

それはともかくとして、今日、こうしてご多忙の中、お出でくださいましたこと、心から感謝申し上げます。

応援隊の皆様方には、それぞれのお立場から様々な場面で青森の元気づくりにご支援をいただいております。厚く御礼申し上げます。

日本の国が、もう地方は全部そうなんですが、本格的な人口減少社会を迎えまして、私ども青森県におきましても、少子高齢化が進行している中、私ども青森県が人口減少社会を乗り越え、さらなる成長を続けていくためには、何よりも県民の経済的基盤の確立が重要となると考えております。このため、特に青森県が持つ資源を県外や海外に積極的に売り込み、本県に「経済を集め」、そして地域でその「経済を回していく」ための施策を現在、重点的に進めております。

近年、様々な分野で取組の成果が着実に現れてきております。例えば、昨年は国際定期便の青森－天津線が就航いたしましたほか、青森－ソウル便の増便、台湾定期チャーター便の就航と国際航空路線も充実し、新幹線や多様な船の航路、国内外の都市を結ぶ航空路線とい



った「陸・海・空」の交通ネットワークを組み合わせました「立体観光」、これも私どもが提案をしたものですが、「立体観光」を強力に推進いたしました結果、国内外から多くの観光客の皆様方にお越しいただきました。特に昨年の外国人の延べ宿泊者数は、1月から11月までで既に過去最多の22万人に達し、東北トップとなっております。

また、全国に先駆けて取り組んでまいりました「攻めの農林水産業」につきましても大きな成果がございました。平成28年の農業産出額は19年ぶりに3,000億を超え、大台までまいりました。13年連続で東北トップを堅持いたしますとともに、全国順位は7位でございますが、なによりも成長率25%を超え、まさに農業の成長産業化という方向に導くことができた、そういう状況でございます。

またホタテの生産額は2年連続で200億円を確保し、それまで100億とか70億とかがやっとだったので、倍増ということになります。そしてリンゴの販売額は3年連続で1,000億円の大台を突破するなど、いずれも好調に推移いたしました。

3年連続で特A評価をいただきました「青天の霹靂」は、デビュー3年目を迎えました。銘柄米の産地間競争が激化する中で、29年産は「こんにちは、さっぱり」、さっぱり感、そういった新しい味わいのあり方ということ 키워ワードに、食味にこだわったPR活動を全国で強力に展開しております。実は1万トンしか生産してないんですが、もう92%出たしまったということで、これは戦略的にどう持っていくかということも、また悩みと思っております。今後もブランド化に向かって積極的な取組を進めたいと思っておりますので、何とぞ、応援をいただければと思っております。

そして、現在、青森県では人幸、「口」ではなくて「幸」の字をあてているんですが、「人幸増加大作戦」のキャッチフレーズのもと、人口減少克服に向けた様々な取組を展開しておりますが、本日は特に「経済を回していく」県の取組を説明させていただきます。

何とぞ応援隊の皆様方には忌憚のないご意見、ご提案を賜りますようお願い申し上げますとともに、今後とも青森県のイメージアップや情報発信など、一層のお力添え、そしてアンテナショップ「あおり北彩館」のご愛顧もまた併せて賜りますようお願い申し上げます、ご挨拶とさせていただきます。

どうぞ、本日もよろしくお願いたします。

【人幸増加大作戦（「経済を回す」ための取組）について】

※企画政策部長が、資料に基づき県の取組状況を説明

（知事）

人幸増加の「幸せ」は、経済面ばかりではないのですが、ついこの間まで有効求人倍率が一番低い時で0.3でしたので、本当に働く場、産業・雇用で苦労してきました。十何年前から、保健・医療・福祉包括ケアというのを、実は日本でも一番早く始めているんですよ。保健師のみなさんと懇談会をやった時に、「福祉だ、何だって、それはいいんだけど、何よりも食えるようにしなかったら絶対ダメなんだよ、私たちが現場で思うことは、いろんな5ヶ年計画とか、子育て何とかってプランを作ってお金をバラまくけれど、そのお金を全部、企業誘致とか産業起こしに使った方が、うんといいいんじゃないの？」というようなことを言われたことがあって、結構利きましたね。

やっぱり「食える」算段をしていかなければいけないということ。保健師さんが一番現場を歩いています、社会の問題を全部、生で見えています。すごいですよ、困窮している状態だとか、だから人が人をあやめてしまうとか、いろんなことを全部、見聞きではなく、直接

携わっていますから。

「経済を回す」ということは、要は「食える」ようにすること。とにかく「食える」ようにしなきゃいけないと、もう一生懸命、企業誘致とかをやりまして、この15年間で、430社やったんですよ。

その一方で、特に農山漁村集落が元気じゃないと、青森県の場合、絶対に子どもが増えません。それに、いわゆる過疎という状況に対応していくには、農山漁村、私は「ゆりかご」と言っているんですが、そこで食べ物を作り、子どもが生まれる、お祭りもですね。そういう意味で「ゆりかご」だと。我々にとっての「ゆりかご」である農山漁村集落を守るために、「攻めの農林水産業」という仕組みを提案して、良いものを作り、きちんと経済に替えて、それを農山漁村集落にちゃんと還元しようということを進めたわけです。その成果として、この5年で新規就農とかUターンとかで1,400人ぐらい来てくれています。

あと得意分野である観光にも力をいれてきました。県内に人が滞留する時間の合計を「県内総時間」と言っているんですが、これを増やす形を作っていかなければいけないと。それは、県内に住民票を持っていない人でもいいわけです。

というわけで、観光分野もかなりねっちりと、かなり細かく、国内、国外と担当を割り当て、旅行会社とか航空会社とか、今日は一緒に働きかけてくれた応援隊の鎌田さんがいらっしゃるんで、分かってくさると思います。「立体観光」という仕組みを提案し、インバウンド対策も含めて、冬場にも多くの皆さんが来てくれていることで、経済が回ります。とにかく「食える」ためにはどうしようということが基本にあったんです。



政策体系的に言えば、今日説明した形となり、このことで移住定住や交流人口を増やし、子どもを生み育てやすい環境をつくり、これらを一体的に取り組むことで、人口減少社会の中での幸せを増やしていくことを進めたいと思っているわけです。

そういうわけで、青森の現場は、みんなで力を合わせてここまでできましたが、ここからが正念場。2025年問題は、我々よりも東京周辺の方が圧倒的に深刻で、そのため東京に人が引き抜かれていて、育てては引き抜かれという感じです。それでも、2025年問題、75歳以上になる団塊の世代の方々が、安んじて故郷で人生を終れるような仕組みをどうしたらできるのか、経済のことはもちろんきっちり進めなければいけないのですが、それを支えるべく人口減少スピードを抑制し、なおかつ安んじて命を全うできる地域づくりというのでしょうか、そのことで、今、七転八倒しております。日本の国にとっても最大の課題。でもチャンスでもあると思うんです。2025年問題を「問題」ではなく、大きな「きっかけ」として、どういう社会システムにしていくかということだと思うんです。

我々、果敢に今、地域経営体とか農業グループを作って、先ほどの「ゆりかご」ですね、「ゆりかご」で生まれるだけではなくて、終わっていく命もちゃんと看取れるようにしたいと段取りを進めています。

そうした中で、基本である経済基盤がないと何もできないですし、若い人たちも戻って来ません。起業・創業ができるようになったのは、コーヒーロースターとか眉毛とかネイルアートとかを、経済的に余裕が出ると利用してくれるんですね。それが本当に回るんですよ。

回った経済が、また次を回すものですから、そういうことを積み重ねることを必死に取り組んでいます。国がよく提案する「何とか開発」で一発当てようとするより、もうそんなことは止めよう、自分の経済を自分で集めて、回して、自分たちで生きられるようにしよう。

ということで、私からは、経済をうまく集める仕組みを整えながら、自分たちで、自立とまでは言い切れないのですが、生きられるようにしたいと段取りしている、ということです。

(司会)

それでは意見交換に入ります

今田様、よろしくお願ひいたします。

(今田功氏)

今、知事がおっしゃったように、「攻めの農林水産業」ということで、この3年間、かなりの実績を上げられた。まさに、あちらに知事がいると思ったら、すぐにどこかにいると、非常にお忙しい動きをされていると思います。

誘客も相当ご努力されて伸びた。「まるごとあおもり情報発信」の取組を14年前に知事が始めら、こんなに長く続くとは思わなかったんですが、県の職員の方、優秀だなと思ったのは、皆さん異動をされますがリレーがお上手。次の方がそれを引き継いで、それをまた東京チームと青森チームが一緒になってマスコミに対する戦略を進めておられます。よくマスコミを見ますが、いつも青森のものが土俵に上がっているという、都道府県の中では全国的にも珍しいのかなと思います。

その中で、私たちがパンフレットのPRに関与し、14年間で700件くらい取り上げました。ちょっと気になるのは、ちょっと冷ややかな目で見させてもらいますと、何か男臭い臭いがプンプンする感じがいたします。「攻め」ということで男らしいんですが、これからは、青森の食材を使った素敵なもの、Uターンをされた方、これをもうちょっとクローズアップされてもよろしいのかなと思います。



例えば、弘前のサッシーノ、それから八戸のリンチェというイタリア料理の優秀なところがございますが、これはUターンの方が、基本的には岩木山の素敵な食材、海の幸あるいは山の幸を使い料理されています。

こうした成功した人たちは、青森へのこだわりを持ち、その魅力を外から見ることによって認識し、実際にUターンされてお店を持たれました。その中で実績を残してきた、クリエイティブな方が、青森の魅力をよく知っているんじゃないかと思います。

一つ提案ですが、次のステップとして、生活・クリエイティブということ意識し、青森の食材、もの、人ということ考えた編集とか、「まるごとあおもり」を利用して、成功者の魅力を外へお出しになった方がいいのかなと思います。当然、県外からの移住もあると思いますが、Uターンされた方へ声を掛けた方が良いでしょう。

今までの取組により、東京の人から見て「青森すごい」と、かなり認識されています。量販店に行くと青森がいっぱいあります。ですから、「Uターンをして帰る」ではなく、「クリエイティブに暮らすために帰る」ということを進めると、ちょっと女性の香りがしてくるのか

などと思います。女性から見て、青森の魅力がとても豊潤である理由は「クリエイティブ」にあると。

今週、テーブルウェアフェスティバルが終わりました。28万人来るんですが、91%は女性です。実は女性をねらっています。女性をねらった、非常にクリエイティブなところが対象ですから、こうした場面で、Uターンされた方の素晴らしさや、青森の食材や素材を使ったものを提示されてはいかがでしょう。

もう一つのお願いは木工関連、漆関連、それから布関連です。要するに、「南部裂織」「こぎん刺し」がありますが、こうした工芸関連の強化もしていただきたい。会津に行くと漆の研修センターがあり、富山に行くとガラスの研修センターがあり、外国人もいらっしゃる。それから金沢では、工芸関係の研究や研修が外部の方も含めて盛んです。青森は工芸関連が強いですから、長期・中期的に準備をして、外部からの研修もある程度受け入れる。今、漆関連は若者が減っていますから、そういう人たちを育てるという意味でも、研修活動をお願いしたいと思います。

(知事)

ありがとうございます。ご指摘、ごもっともなこと、改めて思うところです。

どちらかと言えば、うちはバイキング、「おー、取りに行くぞ」「台湾・高尾を落とすに行くぞ」と取って来る感じで、一生懸命、経済を回すパターンを進めてきましたので、確かに男っぽい仕事をしてきたと思います。

まるごとあおもり情報発信の取組では、本当にお世話になりました。広告費換算で、もう1千億をはるかに超えるぐらいの実績をあげています。思い起こせば財政が厳しい中、「もう広告費はダメだよ」と言ったら、「じゃあ、交通費だけで全部やりましょう」とスタートしたんです。

思い出しますね、本当にこの14年間、お世話になりました。2日に1回は、青森がテレビには出ているというぐらいの状況、新聞でも雑誌でもそうです。

そういった、非常にユニークなコンテンツ発信をしていくことを一緒にやってきたこと、思い出します。

ご指摘いただいた「クリエイティブな感じ」、そして「取る」じゃなくて、何か「来てくれる」というニュアンスを作っていくことも、本当に大事だと思っています。

これまでは「攻め」で「取りに行く」ばかり、突撃、突撃で来たのですが、今度は私がUIターンで青森に来てくれた人たちをお連れして、マッチングの会を東京とか仙台でやっています。青森へ来てみたいと集まってくれた方々に丁寧に話をし、仕組みを納得いただき、来ていただく段取りを、直営と言うと変ですが、攻めの農林水産業をやったみたい攻めじゃなくて、今度は「来てね、来てね」という感じのことを進めたいと思っています。

実は商工労働部では「あおもりなでしこ」というのを作ったんです。企業に勤めて、赤ちゃんもいて、でもちゃんと育てられる。実は青森って、家庭も企業も、応援する風土なんです。逆に言えば、少ない人口の中で、そうせざるを得ない面もあります。

そういった中で、子育てをしやすいだとか、そういうことをキャンペーンしようと部隊を作りました。

人口減少の中、経済を集める戦略をしっかりと進めながらも、移住・定住をされた「青森が好き」という方々のその好きな気持ち、ハートを、ちゃんと伝える青森県ということをしていきたいと思っています。

(地域活力振興課長)

私のところでは、移住促進対策を行っておりますので、少しご説明をさせていただきます。移住に関する県内向けの広報の中で、Uターンして活躍している方などの紹介を行っております。また、首都圏などで移住フェアとか相談会を開催させていただいておりますが、そういった場合も、Iターンと言って首都圏から青森を選んでくださった方だけでなく、Uターンして、一度出てきたけれども青森の魅力を再発見していただいて、今はこうやって活躍しているんですよという方を、必ずゲストとしてお招きし、ご紹介しながら、Uターンという選択肢もあるのではなかろうかと。そのために、県内では経済を回す取組をはじめとして環境づくりをしながら、青森に帰ってくる選択肢も発信しているところでございます。

(広報広聴課長)

広報広聴課は、県の重要施策を丁寧に分かりやすく伝えていくという使命がございまして、県民、県外の方々とのつながりを大切にしていこうとしております。「県民だより」では毎回テーマを決め、特に重要な施策であります人口減少に関しては、かなり頻繁に取りあげています。平成29年12月号では、県内に移住された方の情報を載せ、移住して良かった、外から見た魅力、県内に来たら本当に豊かだということをお話していただいております。

これにはかなり反響がありまして、どこに住んで、どういう人なのかという問い合わせも結構ございます。そういった人を随時取りあげて、青森県の住みやすさとか魅力というものをしっかり伝えていきたいと思っております。

(知事)

そういうわけで、このところ攻めてばかりいたんですけれど、今度は、ラブも一緒に、本当にいろんなところでやって歩こうと思っています。マッチングの場面では、移住して、どこが良いのかとか、困ったことははっきり言ってもらって、やり取りをしたいなと思います。

本当に今までは、ご指摘のとおり、男一本という形だったんですが、しっかり対応していきたいと思っています。

(今田氏)

3年前まで、着物小物に関するアドバイスをさせていただきました。県の事業が3年で終わり、次のテーマがないと継続できないことがあります。やっぱり文化活動だけは、知事の力で長く継続できるシステムをお作りいただければと思います。女性たち、特に青森の人たちは、火が着くのがちょっと遅いところがございます。ようやく火が着いた頃に終わるらしいと。一生懸命やっている方には、できたら継続という何らかの手順を採ってもらいたい。やっぱり文化は10年かかりますので、ちょっと見守っていただければありがたいなと思っています。よろしく願いいたします。

(林政課職員)

工芸のうち、木工と漆の関係ですが、特に漆の方、最近、文化庁から国産漆にしていきたいという話がありますし、本県でも津軽塗が文化財に指定されたということもございまして、来年度、県民局の事業なんです。漆工芸の人たちの会が中心となり、新たな漆塗りの造成ということを検討してございまして、来年度からの事業化を進めているところでございます。

あと、木工の方も林業研究所と一緒に、細かい細工などなどの研究を進めております。今回のご意見を伺い、もっと力を入れていきたいなと思っております。

(商工政策課職員)

商工労働部の伝統工芸関係の取組について、私の知っている範囲でご説明をしたいと思います。

伝統工芸を巡る環境が厳しい中、ちょっと前までは、手軽に作れて、かつ手軽に買っていただけの商品を作る取組を津軽塗の業界等が進めておりました。

最近では、商品開発力の強化や販路開拓のため、東京のミッドタウンにおけるテストマーケティングを事業者さんと一緒に進めたりしているところでございます。

いただいたご意見は担当に伝え、今後さらに進めるように頑張ってお参りたいと思います。よろしくお願ひします。

(今田氏)

うちの会社では評判が非常に良く、多分、輪島よりレベルが高いんじゃないかというぐらいになっております。そういう意味では、津軽塗の皆さん、みんなで頑張っているから、やはりそういった頑張った人には、県として依怙最良をしていただいて、伸びる人は優先的に伸ばす方法を探ってもらいたい。

もう一つは後継者の問題で、漆関連に就く若者が非常に少ないということで、アクセサリでもファッション系のもので構いません、漆はいろんなジャンルに対応でき、器だけが全てではございませんので、そういうところを広げていただければなと思っております。これはお願いでございます。

(知事)

県が企業誘致とか連携協定とかでうかがう時には、必ず津軽塗を使っていますし、私がテレビ番組の中で、いろんなものを食べる時も津軽塗の箸を使っているぐらい、実は依怙最良をしています。

(今田氏)

頑張っている方がいらっしゃいますので、そういう人を軸にして、できたら新しい時代の伝統工芸を作っていければ結構かなと。

我々も育てたいなという思いがございますので、ご協力をよろしくお願ひします。

(知事)

よろしくお願ひします。

林政課からも話があったんですが、漆の木から育てて、漆そのものも、うちで作ろうと取り組んでいます。漆塗り産業全体として取り組もうと提案しています。そうしていかないと、どこかが欠けていると、やっぱりうまくいかないことを身に染みて分かったんですよ。裾野というか、漆の木そのものから、漆を掻く金具そのものから、そういう人達をうまく残しながら、それぞれが食えるようにしていくという形をやっていきたいと思います。

(司会)

今田様、ありがとうございました。

それでは次に鶴海様、よろしくお願ひいたします。

(鶴海誠一氏)

世界経済はまだ堅調だと思います。株は大きく動いており、円高になりつつありますが、経済は下支えされて安定的な世界的経済の成長が続くんじゃないかと期待しておりますので、それを前提にお話をさせていただければと思います。

(知事)

ありがとうございます。円は今ぐらいで。輸出でいこうとすれば、大変なので。

(鶴海氏)

大丈夫です、ご安心いただければと思います。

私が青森におりました平成20年頃に比べて、農林水産品の販売額は10%くらい伸びて3,000億円を超えたというのは感無量です。輸出額は3倍、観光が4倍になると。あの頃、知事が掲げられた「実質的な成長を自らの資源でやっていくんだ」というお気持ちで、ここまで数字になって表れると、ものすごいことだなと改めて感じます。あの時、知事の掛け声にも乗らせていただきましたが、本当にやって良かったなと思いますし、まだまだ上があるんだろうなと思っている次第です。

一番びっくりしたのは観光の外国人の入込客が、何と22万人を超えられて、それも4倍になって東北1になったと。これはちょっと予想もしていなかったんじゃないかと思うんです。

お伺いしたいのは、なぜこうなったのかと。多分これまでの地道な努力だけじゃない、何か大きな変革があったんじゃないかという気がいたします。

ここまで数字に表れてきた変化を、今後どうつなげていくかという時に、後継者育成も含めた人材育成とこの施策とのリンケージを、もう少しはっきりと伺いたい。

まあ、高校生ぐらいまでは学習指導要領がありますのでやり様が難しいと思うんですが、大学ですね、さらに言えば社会人になって以降、青森に行けば、こんなことで自分は変われるとか、成長できるんだ、こんなスキルが

身について、この世界でもしかしたらトップになれるかもしれないみたいな。先ほどの漆のこともあるでしょうし、青森ビードロとか、南部裂織とか、ああいう世界もあると思うんです。

当然、青森県内の若い人たちの方向性と人材育成をマッチングさせていくような施策、特に弘前大学と青森公立大学は、県内の学生よりも県外の学生の方が圧倒的に多いわけですので、むしろその方々をどう育てながら、社会の中、青森の中で活躍いただくかという道も含めて、人材育成との関係をぜひアピール、明確化していただけたらと思います。

有効求人倍率が1を超えたというのは奇跡だと私は思っております。私がおりました時は0.3でした。私の時は最悪の時でしたが、1を超えたけれど、日本全体は平均が1.5を超えていますので、正直言えば2とか3という地域もあるということだと思います。

当然、そこでの人材の引き抜き、競争ということにもなると思いますので、ここから先、成果が人材育成につながるというか、人につながるように、ぜひ施策を打っていただければと



思います。

(知事)

いつも本当に応援をしていただいて、ありがとうございます。

最初の観光分野の話ですが、そもそも「攻めの農林水産業」というパターンの中で総合販売戦略課というのを打ち立て、県庁内で課長や職員を募集したところ、結構面白い職員が集まりました。そうした職員がイケイケドンドンと商談会やフェアを開催し、通常取引で売れるものを見つけ、通常取引を増やすということをやリ、100が10%伸びて110になり、次の年は110が10%増えて121になるという複利で伸ばすパターンがある程度できたんです。

もっともっと稼ぎたい観光分野がありましたので、観光国際戦略局を作り、攻めまくるぞと。総合販売戦略課とかまるごとあおもり情報発信とか、そういったところで育成した人材、我こそはという人間を核として集め、どんどん企業回りなどをさせ、人と人とのつながりを作らせました。今田さんからもありましたが、人事異動があっても、うまくつないでくれました。

私もリンゴを売りながら、向こうのテレビに出てキャンペーンをしたり、いろんな所を回って歩きます。韓国では韓国のやり方、台湾では台湾のやり方、中国はああいう難しいお国ですから、一発勝負をしてくるとか、そういうやり方、販売戦略で広げた国内・国外のノウハウを観光分野に転用し、人材も転用し、ただただ地道な努力ですよ。

うちは、ホームランは打てないです。他は結構、ドーンとやっていますが、そんなのやったら持たないわけです。結局、金の付き合いは金で終わるので、人の付き合いで、どんどん行ってもらっています。みんな楽しいのか、ヘトヘトになっているんですが、「出張の方が楽しいですよ」とか言いながらワーワーと行って来てくれるので、人間としてへばらない程度にやってくれと。ということで人間力ですね。青森の県庁の人間力と、あとコンテンツ力、これ売り出したという感じかな。そういう感じで伸ばしてきて、あとは複利。複利で行ったら伸びたという感じですね。足を使っているんですよ。本当に皆、よく段取りをしてくれるんです。その分、私も引きずり回されている、そういう感じです。

それから人材育成の関係なんですが、例えば農業だったら「農業トップランナー」という塾を作って、財務やマーケティングを学ばせ、「50万円渡すから、これで何か作って自分で売ってみろ、レポートを出せ。」という形で中核となる人間を創っていく。地域経営体というんですが、地域内でグループを組ませて、そこで勉強をしていくとか。

あと、もう10年になるんですが「立志挑戦塾」があります。いろんなジャンルの人間に集まってもらい、もうワンサワンサカ揉んで揉んで、そうした人たちがまた散らばって行って、という仕組みとか。あるいは女性のリーダーの「奥入瀬サミット」を開催して、女性の育成の段取りをしたりとか。一番気に入ったのは、「イノベーション・ネットワークあおもり」という、経済団体や学校や大学やその他とも連携をしながら人材育成をしていくというパターンです。

大学はCOC+をやっているんですが、やればやるほど人が育つ、でも他に取りられていくんですよ。これすごい皮肉だと思いました。弘前大学に至っては、すごくどンドンやったら、「いいわね、それ」と中央からバーッと引きが来て、皆行きたいと出て行っちゃう。それをどう残すかというのが課題なんです。

そういうわけで、例えば農業の分野、全般的な育成の分野、あるいは小中高校それぞれに人材育成塾を創り、その中で「経済を回す」こと、財務、マーケティングといった感覚を身に

つけさせ、それぞれの分野に戻り、活躍してもらおうという形に可能な限りしています。ただ、一緒にやっていたイノベーション・ネットワークの頃のあの勢い、あの思いから比べれば、まだ足りないのかなと思うんですけども。

（企画調整課職員）

今は企画調整課ですが、去年の3月まで交通政策課で飛行機の担当をしておりました、3年間いたのですが、その間、韓国、台湾は3年間で20回以上行っていますし、中国も10回以上行っております。やはりできるだけ何回も顔を出し、航空会社とか旅行会社の人に顔を覚えてもらうこと、あと知事に行っていただく前に我々の方で下交渉といいますか、必ずそれをやるようにして、知事が行った時に良い話を引き出せるようにということを心がけてきました。そういうことを繰り返し、繰り返し、やや強引ながら押しかけて行くぐらいの感じで、まさに攻める感じでやった結果でございます。

（知事）

新「友だち作戦」ですね。

あと「立体観光」は良かったと思います。要するに、青森空港にこだわらない、千歳だろうが、羽田・成田だろうが、仙台だろうが全て、特に函館はマイ空港だと。どこに降りてもうちのシステムを組もうよと、それでうまく成果が出るようにしようと。海外の観光客が千歳から入って、鉄道で移動して、青森から帰るとか。自分だけ良くなろうじゃなくて、必ず他県も含めて横と連携をしようということを働きかけました。そうしたらお客さんが半分になるかということ、それは違います、逆に倍に増えますよ、というような形もやったんですね。

（地域活力振興課長）

先ほど移住の話をしましたけど、人材育成も私のところでやっております。地道な人材育成のお話をさせていただきますと、これは本当に知事の言葉でお伝えをした方が伝わるのですが・・・

10年ほど前、青森県にお金がないという時に、やはり「人が大切だ」、「人づくりに力を入れろ」ということで、「あおもりを愛する人づくり戦略」を平成19年に立てました。それ以来、人づくりに力を入れており、「あおもりの未来をつくる人財」として子どもや学生さん、それと「あおもりの今をつくる人材」として産業界の方の人材育成に取り組んでまいりました。その基幹的な取組として社会人の方、中でも若手、20代、30代の方が志をたて、それにチャレンジしていく精神とか、取組方法を学んでいただこうと「立志挑戦塾」というものを開催し、10年目になりました。

最初は、野田一夫先生に塾長になっていただき、今は天明茂先生に塾長をしていただいております。毎年30名程度、1泊2日の塾を6回行い、様々な講師の方のお話を聞いたり、ディスカッションし、その中で実践力を身に付けていただくということをしております。これまで卒塾した人たちの中で、例えば立志挑戦塾の卒塾生と先ほど知事が申しあげました農業のトップランナーの塾を経験した人、そういう人たちが一緒になって、「青森マルシェ」というイベントを企画して自ら実施したりといった自主的な経済活動、自分の会社の仕事だけでなく、地域に根差した活動に取り組むといった動きが相当数見られております。これからは、そういう人材がさらに人材を育てていくという方向で、人材づくりの輪が広がっていけばいいなと思っておりますのでございます。

(商工政策課職員)

リレーションシップバンキングの観点からご説明申し上げます。

まさにタイムリーでございまして、リレーションシップバンキングを青森県ではこれまで進めてきたのですが、その計画の5年間がちょうど今年度まででございまして、昨日、今後5年間の新たな計画を協議会で関係機関にご同意いただいたところでございます。

その新たな計画のポイントは二つございまして、リレーションシップバンキング、地域密着型金融のさらなる推進に向けて中小企業と金融機関のコミュニケーションをもっと進化させていきたいと思いますというのが一つめ、二つめが事業性評価、中小企業の事業性をきちんと金融機関が評価して、それに基づく最適な解決策、最適なソリューションを提供していきましようという二つをテーマに掲げております。

この二つめの実現のためには、金融機関の職員のコンサルティング能力の向上が必要になります。それはもちろん金融機関内部でも研修を行いますし、県が、あるいはイノベーション・ネットワークあおもりが研修をやった方が効率的であれば、それは県が皆さんのお役に立ちますという取組をして、そうするとそのコンサルティング能力を発揮することによって、今度は経営者を含む企業の方の人材育成につながっていくと考えております。それがさらにまた金融機関の能力向上という正のスパイラルに回っていけばそれが理想かなと考えているところでございます。

もし、金融機関さんにもっと人材育成の観点でこういうことをやってもらった方がいいんだよ、ということがあれば、ぜひご教示いただければと思います。

(企画政策部長)

先ほど弘前大学、それから公立大学の学生さんをうまく人材育成して県内定着につなげるという取組についてご意見がございました。知事から、COC+という言葉が出たわけですが、この現在の取組状況について簡単にご紹介いたします。

COC+という文科省の事業でございまして、大学生の地元定着を進めるための取組でございまして。現在、弘前大学が基幹大学となって、県内の大学とネットワークを組んで、県内の各大学、各ブロックに分かれて地元定着のための取組をしております。

具体的には、例えば地元志向の大学のカリキュラムを変更したりとか、地域へのインターンシップ、それから企業へのインターンシップ。企業につきましても産学官連携ということで、COC+に協力する企業、県が100社以上のネットワークを作りまして、その企業と連携をしながらインターンシップなども進める取組を、現在、進めているところでございます。

特に青森県は、意外なことなんです、大学の1学年の定員が岩手県、秋田県よりも1,000人以上多いということでございますので、ある意味、県内の大学の定員が多いということは、いずれにしても大学に人が来るわけですので一時的に人口のダムになってくるわけですので、できればそれを逃がさず県内にしっかり定着させるということで、このCOC+の事業というのは非常に大事だと思っており、弘前大学と連携を組み合わせながら、今、一生懸命進めているところでございますが、先ほど知事が申し上げましたとおり、なかなかやっぱり東京圏の引きが強いということで・・・

(知事)

育てると、連れて行かれるんですよ。

(企画政策部長)

理工系の引きが非常に強く、なかなかその辺では弘前大学、それから八戸工業大学も非常に苦労している面があると聞いてございます。また、八戸高専もそうでございます。引き続き、県内企業の掘り起こしをしながら、地元定着につなげる取組を、県と大学が連携しながら進めているところでございます。

(知事)

育てると連れて行かれるものですから、首都圏の大学、専修とか東海、そういうところと連携して、逆にこっちが取りに行っているんです。

(企画政策部長)

今、知事からお話がありましたが、県外の大学から取り返すための連携協定というのを、今、5つの大学、専修大学、日本大学、国士舘大学、東北工業大学、拓殖大学と結んでおります。私ども、県内出身の学生さんに情報を直接届ける手段が今までなかったのですが、連携協定を結ぶことによりまして、大学生に直接県内企業の情報を届けることができるということと、それから親御さんが子どもさんの就職の県内、県外の意思決定にかなり大きな影響を与えるというアンケート分析も私ども得ておりますので、親御さんにも県内の企業の情報をお伝えできるということが非常にメリットということで、県外から取り返す取組も併せて進めているところでございます。

(司会)

鶴海様、ありがとうございました。

それでは次、橋本様、よろしく願いいたします。

(橋本明彦氏)

私が県庁におった二十数年前は、非常に暗い消費の停滞した時代でございまして、補助金の不適正支出問題もあり、3年間、青森の飲み屋街も非常に暗かった時代でございます。

「経済を回す」ということで、時間も限られておりますので要点だけ述べたいと思います。

青森県では、ホタテに非常に力を入れておりましたが、100億いけば御の字だった時代しか知らないのですが、それがもう200億を超える水準になったということは、知事さんはじめ関係者の非常なご尽力があったと感謝しております。

その経済を回す取組の一つのネタとしてですが、昔と違って消費の世界に非常に関与してきているのは、女性がともかく進出してきていることだと思います。女性の消費に同調した男性の消費も、それに連れられて増えています。

先ほどプロテオグリカンの話がございましたが、これは元が水産物でございまして、製品としては非常に女性受けのするものが増えてきています。ただ、残念ながら首都圏にあまり浸透していないので、ぜひこちらを女性向けにアピールをしていただきたいと思います。



地場産業でも旅行でも特産品でも、女性の志向、あるいは目線というものに配慮することは、これからの時代、特に必要になってくるのではないかと思います。

私の家の恥を忍んで言えば、私は車が趣味なんですが、車の種類を決めるのだけ私がやらせていただいて、それ以外の旅行先であるとか食事先、あるいは家具、電化製品、そういったものを買う際の全て決定権は、うちの女房が持っております。今年サラリーマン川柳で「何事も妻ファーストでうまくいく」というのがございましたが、ぜひ青森県も女性の発想、それから女性の目線、そういったものを強く生かした政策を続けていただければ、自ずと経済もついてくるのではないかと期待をしております。

簡単でございますが、以上でございます。

(知事)

ご案内のとおり、漁業権までも女性が実権を握るような時代、沿岸漁業という意味ですけども、本当にそういう時代。農業に至っては、今一番利益をきちっとあげるシステムを作っているのは女性の農業家とか、あるいは6次産業をやっている方々で、本当に男女共同参画という言葉もなくしたいぐらい、もっともっと女性の活躍の場を創っていかねばいけないと、そう私自身も思っております。

県庁の採用も、このところ4割以上が女性の状況になっていきますし、そのぐらい、すみません、今日来ているのは親父ばかりで、女性は3人だけという感じなんですけれども、だいぶ変わってきました。

今日、除雪とかダムの要望に行ったんですが、土木という最も男性的だったところに、私が付けたんじゃないですよ、自分たちで「あおもりドボジョきらきら推進チーム」という名前にしたというので、それでも20人くらいのグループができて、農業・土木と一緒に勉強会をやったり、あるいは現場で、急傾斜崩壊地、砂防をやったりとか橋梁の施工をやって成功させたりとか、今、駒込ダムの発注の段取りなどを女性がやっているんですが、そういう時代になりました。「林業女子会」というのもできまして、県だけではなくて、それが民間とも連携をしながらという形で、実は青森県では、女性の方々が思いっきり先頭に立って、県ですらそうなっているんですが、民間の方でもそういう流れが出てきていると感じています。

本当におっしゃられるとおりで、決定権は女性にあるという時代ですが、我々としては、ここで「家事男子」とか「イクメン」とか、いろいろ言っているんですが、そうしたことを意識せずとも、当たり前なことだと男性の職員たちにも徹底をしていきたいと、今、進めています。先ほど、「あおもりなでしこ」の話をしました。そういった、どれだけ女性が働きやすい環境にあるかということも、どんどんアピールをしていかねばいけないと思っています。

それと起業・創業が年間で110社ほど出てきたのですが、それも実は女子型が多いんですね。今、青森県としてお話をさせていただいているのは、今までは確かにネイルアート、ジュエリーを創るだとか、コーヒーロースターだとか、東京でしか成り立たない仕事に見えるかもしれないのですが、人生の多様性は職業の多様性、青森でも起業・創業をどんどん応援するぞということで、つい4、5年前までは年間5社ぐらいしかなかったんですよ、起業・創業って。今はUターン、Iターンという形で、青森で人生にチャレンジできる、その場面においても女性が思いっきり起業・創業してくれています。

そういう流れというんですか、もう本当に志向や目線に配慮した戦略、まさにおっしゃられるとおりで、それを着実に進めたいと思っています。

(企画政策部長)

県といたしましても、多様な仕事にチャレンジできる環境づくり、それから地域社会、地域経済を担う人材の育成ということで、いろいろな取組を進めております。

これまでをご紹介いたしますと、先程も出ましたが、女性人材の育成として「奥入瀬サミット」を、毎年1回、県内の企業の幹部の方を中心として、女性人材のネットワークづくりということで開催いたしております。

それから、知事から起業・創業ということを申し上げましたが、起業にチャレンジする女性のサポート、それから先ほど橋本様からお話ございましたように、消費者ニーズに対応した売れる商品、サービスの開発に取り組む女性マーケティング人材の育成などにも県としても取り組んでおります。

あともう一つ大事なところは、女性が安心して働ける環境づくりでございますので、県として、今力を入れておりますのは「あおもり働き方改革推進企業認証制度」で、企業の受入環境づくりということも進めております。また、知事から何回もお話が出ましたが、「あおもりなでしこ」ということで、県内企業で働いている意欲ある女性が、逆に県外に出掛けて行く、もしくはいろんな県内の学生さんとか女性の方に、青森で働くことの素晴らしさを伝える取組もしているところでございます。

引き続き、女性の目線に立った様々な取組を、積極的に進めてまいりたいと思います。どうもありがとうございました。

(司会)

ありがとうございました。

それでは予定のご発言はここで終了となりますが、最後に大西様から、一言、エールをお願いいたします。

(大西達也氏)

ご指名をいただき、ありがとうございます。

私、「津軽海峡交流圏ラムダ作戦会議」のアドバイザーとして、先ほどご紹介がありました道南と青森県全域のまさに交流をどうするかという作戦会議に参加させていただいております。

先ほどから女性の活躍、あるいは人幸増加のお話がありましたけれども、まさにラムダ作戦会議に参加していること自体が、幸をいただいているような感じで、いつも参加させていただいております。

他の自治体でこういう会議をやりますと、先ほどもありますが、大体こういうダークスーツで、皆、ネクタイをしてやってきて、ということなんですが、ラムダは確か女性が半分以上、出席率になると8割女性ですね。ですからだいたい私と弘大の森先生だけ男性という状況の会議を、もう5年くらいやらせていただいております。そこから出てきた「津軽海峡マグロ女子会」、今日も非常に僭越な言い方ですが、なぜ「マグロ女子会」の話が出てこないんだろうと思いつつながら、すごく不思議な感じだったんです。どうも県内での認知度とか評価とか、俗人で知っている方が多いので、評価しにくい部分もあると思うんで



すが。

先日、経団連の地方創生ミッションから、「どこか全国の自治体さんで、面白いことをやっているところはないですか」みたいなヒアリングを受けたので、「マグロ女子会」を紹介すると、既に日程も予定も決まっているのに青森方面の視察の中にそれを組み入れて欲しいみたいな、多分、企画政策部にはすごく苦勞をしていただいたと思いますが、そのぐらい東京で見ている、「この人たちは面白いね。何かすごいことをやっているね。」という評価があるようでございます。ちょうどその2カ月後に観光庁長官賞・・・

(知事)

いただきました。

(大西氏)

あれは、ちょっと私もびっくりしたんですが、やはり地元の方々に、女性が自主的に集まって、しかも県を超えて、勝手に海を飛び越えてやっているという活動に対する世の中の評価というのは、非常に高いんですね。本人たちがそれを分かっているのかどうかは、よく分かりませんが。

(知事)

本人たちは楽しんでいるだけです。

(大西氏)

少なくともそういう方々がいる地域、そういう方々が県内あちこち飛び交って、それこそ下北から津軽、それから弘前から八戸と動きまわっている姿というのは、外から見ると、すごく生き生きとしたように映りますし、あと何よりも本人たちが一番楽しんでやっているところは、これは一つ県を挙げて、今はかなり放し飼い状態だと思いますが、サポートをしていただいてもいいのかなと思いました。

そういう意味では非常に活躍をしている女性たちがいっぱいいらっしゃるので、そういう方々をぜひ県内でもプレイアップしていただければいいなと思いました。

僭越ですが、以上でございます。

(知事)

ありがとうございました。

(司会)

大西様、ありがとうございました。

それでは、これをもちまして「元気あおもり応援隊会議」第1部を終了させていただきます。

ありがとうございました。